

# 佐川町「道の駅」基本計画

令和2年8月  
高知県佐川町

---

# 目次

<b>1</b>	<b>はじめに</b>	1
1.1	計画策定の背景	1
1.2	佐川町道の駅の目的	2
1.3	計画地	3
<b>2</b>	<b>佐川町の現状分析</b>	4
2.1	自然及び地理的環境	4
2.1.1	自然	4
2.1.2	地理的環境	4
2.2	歴史・文化	5
2.3	人口	6
2.4	産業	7
2.4.1	農業	7
2.4.2	林業	8
2.4.3	商工業	9
2.4.4	観光	10
2.5	交通	11
2.6	防災	12
2.7	施設立地	13
2.8	その他資源等	14
<b>3</b>	<b>道の駅の役割</b>	15
3.1	地域の課題と道の駅に期待する効果	15
<b>4</b>	<b>道の駅のコンセプトと顧客ターゲット</b>	16
4.1	道の駅のコンセプト	16
4.1.1	基本コンセプト及び名称	16
4.1.2	運営コンセプト	19
4.2	ターゲット設定	20
4.2.1	入込客数の予測	20
4.2.2	入込客数の目標	21
<b>5</b>	<b>備えるべき機能</b>	22
5.1	休憩機能	22
5.1.1	駐車場施設	22
5.1.2	トイレ施設	22
5.1.3	休憩施設	22
5.2	情報発信機能	22
5.3	地域連携機能	23

---

---

# 目次

5.3.1	来場者を馳走して、もてなす機能	23
5.3.2	町民、来場者が長時間楽しめる機能	24
5.3.3	出品者・参加者を応援する機能	26
5.4	防災拠点機能	27
5.5	参考資料	28
5.5.1	制度としての道の駅機能	28
5.5.2	道の駅整備方式	28
<b>6</b>	<b>整備する施設・規模</b>	<b>29</b>
6.1	整備する施設・規模	29
6.2	規模の算定	30
<b>7</b>	<b>配置計画</b>	<b>31</b>
7.1	施設配置	31
7.2	動線	32
<b>8</b>	<b>景観・意匠計画</b>	<b>33</b>
8.1	トータルデザイン	33
<b>9</b>	<b>事業手法</b>	<b>34</b>
9.1	整備手法	34
9.2	管理運営手法及び主体	34
9.3	運営体制	36
<b>10</b>	<b>収支計画</b>	<b>37</b>
10.1	整備事業費	37
10.2	財源確保対策	37
10.3	運営収支計画	38
<b>11</b>	<b>事業スケジュール</b>	<b>39</b>
11.1	整備スケジュール	39
11.2	運営スケジュール	39
11.3	店舗等機能スケジュール	39
11.4	おもちゃ美術館整備運営スケジュール	39
<b>12</b>	<b>実現に向けた課題</b>	<b>40</b>
12.1	道路の改良	40
12.2	新商品開発と既存商品ブラッシュアップ	40
12.3	運営組織の設立	41

---

# 1 はじめに

## 1.1 計画策定の背景

道の駅建設計画については、住民からの要望を受けて平成20年代半ばから検討してきた経緯がありますが、事業化には至りませんでした。それが再び動き始めたのは、平成26年度から27年度にかけて策定した「第5次佐川町総合計画（H28～R7）」が大きなきっかけとなりました。

「みんなでつくる」をテーマに分野別、世代別、地区別に住民ワークショップを重ね、佐川町の10年後を見通した明るい未来像を作り上げました。その中で、産業振興や観光振興の拠点として道の駅建設を望む住民の声が多くあり、道の駅を含めた販売施設の整備目標を施策に反映しました。

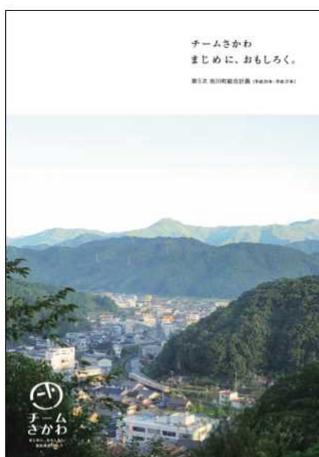
更に、東京圏への人口一極集中を是正する地方創生の流れを受け、平成27年度に策定した「佐川町まち・ひと・しごと創生総合戦略（H27～R1）」の中でも、ブランド戦略による生産・販売の強化を目指し、新たな販売拠点としての道の駅整備を「しごとづくり」の重要な施策の一つに掲げました。

なお、令和元年度に策定した「第2期佐川町まち・ひと・しごと創生総合戦略（R2～R6）」の中でも、道の駅整備を地産外商の核として、また子育て応援の施設として、重点的施策に位置付けています。

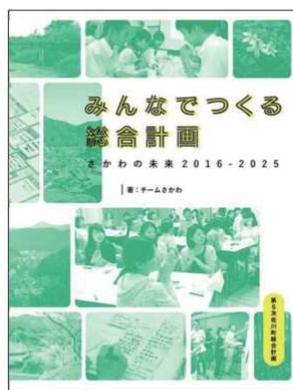
以上のような町の基本的計画に具体的施策として反映した上で、平成28年度以降は住民や有識者による「道の駅検討委員会」で幅広く意見を聞き、建設候補地の選定を進めるとともに、令和元年度は各方面で活躍する住民代表によるワークショップを開催し、道の駅基本構想を策定・公表するに至りました。

本計画では、この基本構想を基に、より具体的な計画の中身について体系立てて整理・検討を行います。それを計画として落とし込む中で、周辺環境を踏まえた地域課題を洗い出し、佐川町での道の駅に相応しい姿・目指す方向性をより明確にすることで、今後の施設整備や事業運営計画等に繋げていきます。そして、住民が待ち望む素晴らしい道の駅が実現するよう、また住民と一緒に「チームさかわ」で道の駅を盛り上げ、持続可能な施設運営ができるよう、本事業を推進していきます。

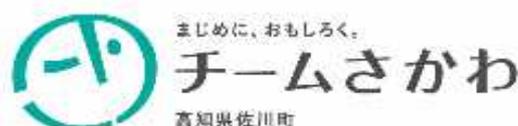
### 【第5次佐川町総合計画】



本冊



別冊



---

## 1.2 佐川町道の駅の目的

佐川町は高知県の中西部に位置し、豊かな森林と清流に囲まれた自然豊かな中山間地域です。そして、おいしい農産物と歴史情緒ある古い町並みが今も残り、植物を愛する温かい人々が集う、笑顔があふれるまちです。

一方、若年層の町外流出による人口減少で少子高齢化は年々進行しており、自治会などの地域活動を支える担い手が不足し、地域の活力が失われつつあります。また、主要産業である農業・商工業についても後継者不足が続いており、事業承継や担い手の育成が喫緊の課題となっています。

当町ではそのような中長期的な課題に対応するため、前章で述べたような「総合計画」及び「総合戦略」を策定し、幸せなまちづくりに取り組んできました。中でも、令和2年3月に策定した「第2期佐川町まち・ひと・しごと創生総合戦略」では、第一の基本目標に「地産外商を中心に魅力のある仕事をつくる」を掲げており、町内の産業振興を川上から川下まで体系的に進め、足腰を強めながら生産者の所得向上と仕事の創出を推進することとしています。

その中で、佐川町を全国へ売り出す広報・PRの拠点として道の駅を位置づけ、観光による経済波及効果と人の交流が町内全域へ及ぶよう、地域一体となって取り組んでいます。また同時に、総合戦略では、本町出身の牧野富太郎博士がかつて愛したように、町民みんなが植物を愛し、育てるを楽しむまちづくり「植物のまち」を佐川町の代表ブランドとしてシティプロモーションを推進することとしています。

道の駅はこれらの取り組みの「芽」となり、やがて「花」を咲かせ、幸せの輪が「根」を張るように徐々に広がっていくよう、自然と一体となった道の駅から広がるまちづくりを進めていきます。

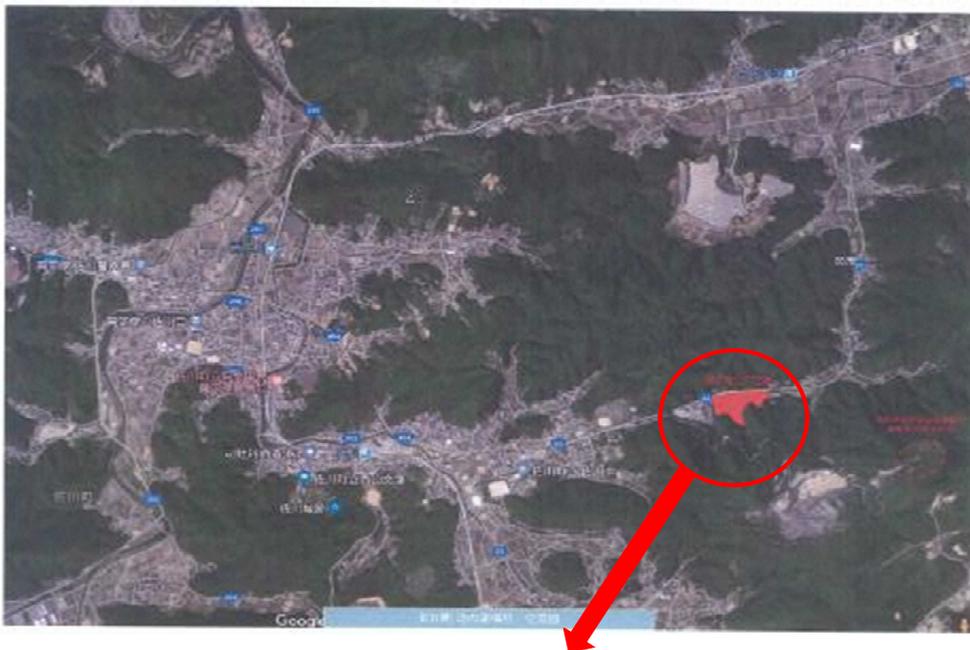
以上の基本的方向と道の駅基本構想でまとめた3つの視点（モノづくり、ヒトづくり、コトづくり）を踏まえ、道の駅の目的として下記の3点に整理しました。

- (1) 地元産商品の販売拠点として整備し、商品開発・磨き上げによる生産者・事業者の所得向上と人材育成を図ります〈モノ〉
- (2) 販売や飲食施設、公園、各種体験型施設を通じた地域の憩いの場として、人と人が出会いつながるよう、町内外の交流を促進します〈ヒト〉
- (3) 地域公共交通も活用し、観光案内施設として上町地区や町内全域への経済効果を波及させる拠点を目指します〈コト〉

### 1.3 計画地

整備計画地については、平成28年度から29年度にかけて道の駅検討委員会を開催し、住民や有識者、関係団体、国、県等から意見を聞き、慎重に検討を進めてきました。その結果、以下の理由により佐川町加茂、長竹地区（現在の霧生関防災拠点施設）に決定しました。

- (1) 国道33号沿いで中心部に近い2か所で検討したが、用地関係等で断念
- (2) 自然に囲まれた地形は、森や植物を守り育てる当町のまちづくりに合致
- (3) 高知県が進める産廃処分場建設の地域振興策として、住民の声を反映



【写真1-3 道の駅計画地（佐川町加茂、長竹地区）】  
下写真中の黄色：町有地、水色；国有地、紫色：民有地

## 2 佐川町の現状分析

### 2.1 自然及び地理的環境

#### 2.1.1 自然

町全体面積の約70%を森林が占め、虚空蔵山（674.7m）や勝森（544.8m）、蟠蛇森（769.2m）などの山に囲まれた中央盆地状の地形で、町内が源流の柳瀬川などが北流し、仁淀川に合流しています。温暖多雨な気候ですが、冬季はしばしば降雪も見られ、春や秋に霧が発生することもあります。世界的な植物学者・牧野富太郎博士を育んだ豊かでバラエティに富んだ自然がまだ残っています。

また、130年余り前、日本地質学の創始者と言われたドイツの地質学者エドモンド・ナウマンが佐川を訪れ、古生代から中生代にわたっての幅広い時代の地層が至るところに露出しており、世界的に貴重な化石も産出されることから、佐川が地質学上とても重要な地であることを世界に紹介し、「地質のメッカ」としても知られるようになりました。

#### 2.1.2 地理的環境

高知県の中西部に位置し、高知市から約27km、車で1時間圏内の距離にあります。総面積は約101km<sup>2</sup>、周囲は越知町、津野町、須崎市、土佐市、日高村の5市町村に囲まれています。広域的に見ると、高知市と愛媛県を結ぶ国道33号、須崎市方面と繋がる国道494号とJR土讃線が交差する交通の要所でもあります。



【図 2 - 1 - 2 広域図】

## 2.2 歴史・文化

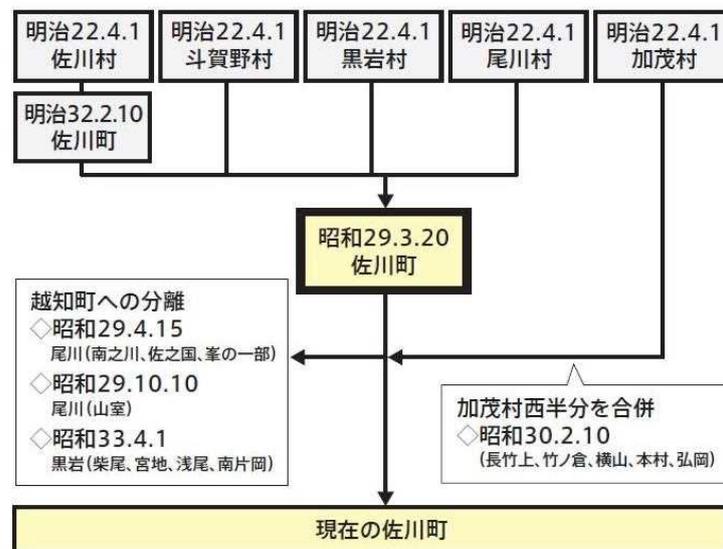
佐川町の歴史は古く、不動ガ岩屋洞窟より出土した土器から、約1万2千年前（縄文時代）から人類が生活していたことが分かっています。文献で佐川の歴史が確認できるのは、南北朝動乱の時代になりますが、数カ所の遺跡や窯跡などから律令制度に組み込まれていく様子や、文化財として残る仏像などから当時の文化が佐川まで及んでいたことがしのべられます。

中世を経て、戦国時代に入り、後に土佐国を統一した長宗我部元親の重臣・久武親信が1573年、古城山に居城を移し佐川城としました。久武親信没後1603年には、関ヶ原の勲功により徳川家康から土佐24万石を賜った山内一豊に伴い入国した山内家の筆頭家老・深尾和泉守重良が、佐川1万石を預かることになり、以来12代270年間、明治維新に至るまでその城下である佐川に封建文化の花を咲かせました。

佐川城は、1615年に徳川幕府の一国一城令により取り壊されますが、深尾氏は古城山の東麓に居宅と政庁を兼ねた土居を構え、周辺に郭中町（侍町）、町人町が形成されます。町人町には、深尾家への謁見を許された有力町人が見られるようになり、そのほとんどが酒造業を営んでおりました。適した自然条件もあり、佐川で大いに酒造りが繁栄することとなりました。当時の名残は今も上町周辺に色濃くとどまり、伝統的な商家住宅や酒蔵などが風情のある町並みを形成しています。

また、深尾氏は代々文教政策に力を入れ、郷校名教館を創設し、文教の町の礎を築きました。当校の教育は、天文学、数学、英語などかなり高度なレベルであったと伝えられています。こうした文教の歴史から、佐川町は幕末から明治・大正・昭和にかけ、田中光顕（1843～1939年）をはじめ多くの志士を輩出し、その後も牧野富太郎博士（1862～1957年）をはじめ、植物学、文学、芸術などあらゆる分野で多くの「文教人」を生み出してきました。

佐川町は、昭和29年に町村合併促進法の施行により、旧佐川町、斗賀野村、尾川村、黒岩村が合併し、さらに昭和30年に加茂村の一部を合併し発足、昭和33年の境界変更を経て、現在に至っています。



【図 2 - 2 町の沿革図】

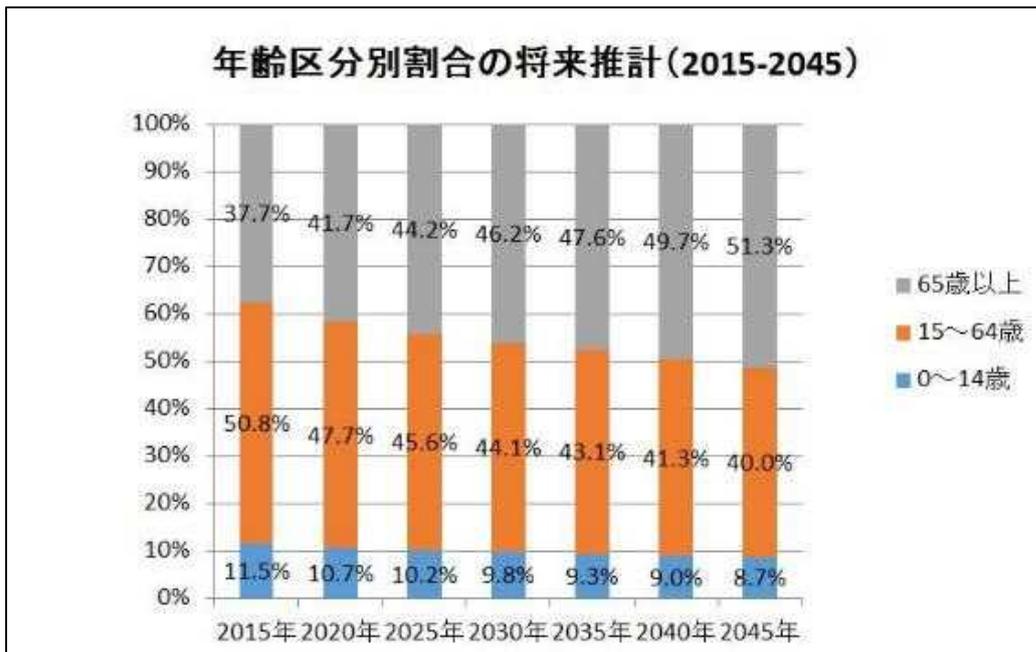
## 2.3 人口

総人口については、現在12,635人（2020年（令和2年）4月時点／住民基本台帳）ですが、25年後の2045年には約7,872人まで減少すると予測されています。また、その年齢区分別人口では65歳以上に比べて、14歳以下、64歳以下の減少割合が大きく、高齢化率は2015年（平成27年）に37.7%でしたが、2045年には51.3%まで上昇する推計となっています。



【図2-3-① 佐川町人口推計】

（出典：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」2018年（平成30年））



【図2-3-② 佐川町人口推計（年齢区分別割合）】

（出典：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」2018年（平成30年））

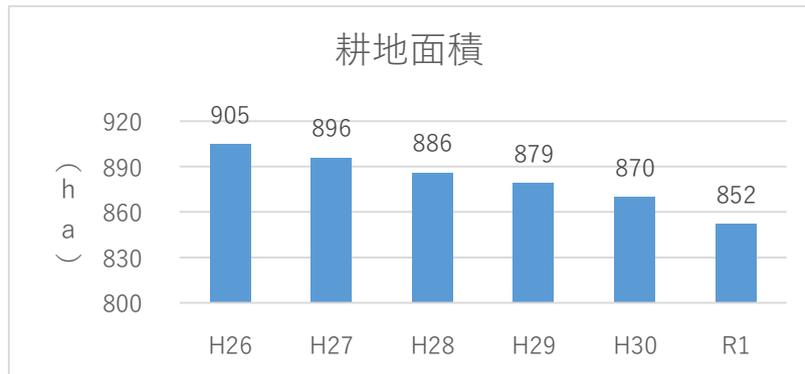
## 2.4 産業

### 2.4.1 農業

佐川町は、標高20～800mの中央盆地状の地形で、昼夜の温度差が大きい  
ため、数々のおいしい農産物に恵まれています。全域で主に水稻栽培が行われて  
いるほか、イチゴ・梨・文旦・生姜・ニラ・茶・乳牛等の産地として知られて  
います。イチゴは、高知県下1位の生産量を誇り、糖度が高く、上品な甘さが  
魅力で、特に佐川地区や斗賀野地区で生産される「ゆめのか」「さちのか」は  
大変人気があります。また、黒岩地区は古くから梨や茶の産地として有名で、  
味・香りとも素晴らしく、ともにブランド化が図られていて、市場でも高い評  
価を得ています。

しかしながら、農家の高齢化が進み、農業の担い手不足が深刻化しており、  
個々の農家では農地を維持・管理していくことが困難な状況にあります。農業  
産出額は年間約28億円ほどで推移していますが、町内向け農産物直販所の生  
産者数・売上はともに伸び悩んでいる状況にあります。

今後は、若者にとっても農業が魅力とやりがいのある職業として選択し得る  
ものとなるよう、佐川の農業の強みを生かして、地域ぐるみでの共同の取組や  
6次産業化など農産物を活かした付加価値の高い商品の開発、また、地産地消  
の推進、販路拡大による地産外商の推進等により所得の向上や新しい仕事づく  
りを支援していく必要があります。



【図 2 - 4 - 1 佐川町耕地面積 出典：作物統計調査】



【図 2 - 4 - 2 佐川町農業産出額 出典：市町村別農業産出額（推計）】



【写真 2 - 4 - 3 佐川の農産物のイメージ】

## 2.4.2 林業

町全体面積の70%以上を森林が占めていますが、林材価格の低下等により、そのほとんどが間伐等の森林管理が行われていない状況で、森林の荒廃が深刻化しています。そこで、佐川町では持続可能な森林経営を目指し、限られた森林資源でより多くの雇用を創ることを目的として、平成25年度より自伐型林業の取組を始めています。

自伐型林業は、50年後・100年後に価値ある山づくりを目指し、基本的には皆伐をせずに間伐を繰り返す超長伐期施業です。高性能機械を導入するよりも雇用を生むことができ、副業から専業まで個人のライフスタイルに合わせた施業が可能となります。自伐型林業を推進する取組として、総務省の地域おこし協力隊制度を活用し、普及・実践する中心的人材を育成しています。任期終了後も定住できるような支援体制を整えたり、町が林地の集約・管理を実施することで施業地の確保を行っています。

また、搬出された間伐材に新たな付加価値を与える取組を推進するため、レーザーカッターをはじめとする多くのデジタル加工機器を備えた「さかわ発明ラボ」を整備し、町産材を利用した新たな商品開発の仕組みを強化しています。

ふるさと教育の一環として、森林や林業の教育も始めています。平成30年3月には木育を普及・推進させる「ウッドスタート宣言」を行い、赤ちゃんに町産材ヒノキでつくった積み木をプレゼントしています。子どもの頃から木を身近に感じ、森林整備の大切さやモノづくりの楽しさを知る機会を創出しています。

林業就業人口

年度	(人)
H 2 7	19
H 2 8	34
H 2 9	37
H 3 0	34
R 1	30

森林面積（平成30年度） (ha)

国有林	民有林		計
	公有林	私有林	
0	167	7,019	7,186

民有林資源現況（平成30年度） (ha)

針葉樹				広葉樹	立木地総数
スギ	ヒノキ	マツ類	計		
819	4,064	481	5,364	1,754	7,118

【図 2-4-2 林業就業人口、森林面積、民有林資源現況】  
(出典：高知県の森林・林業・木材産業に関する統計データ集)



【写真 2-4-2 佐川の自伐型林業のイメージ】

### 2.4.3 商工業

佐川町は、スーパーマーケット、ドラッグストア、家電量販店、衣料品店など大型商業店舗が多数存在し、仁淀川流域の商業拠点としての機能もあり、小売業全体としては年間商品販売額は増加傾向にあります。しかしながら、大型店舗の進出により、従来の地元商店街等では経営の存続自体が困難となったり、経営者の高齢化が進み、後継者不足により事業の承継が困難となり、廃業する事業所も少なくありません。

一方で、司牡丹酒造や吉本乳業など町内外に多くのファンを持つ老舗製造販売会社に加え、近年はパン、ケーキ、チョコレート、プリン等のスイーツを中心に加工製造する若い事業者が増えていて、新しい佐川の定番商品が生まれつつあります。空き店舗を活用して、チャレンジショップに出店する人や飲食店を起業する地域おこし協力隊、町内各地区の集落活動センターを利用して加工品をつくる人・グループの人材も育ちつつあります。

佐川町の強みである食料品製造業を生かした産業振興が必要で、モノづくりの芽を支援し、広く展開していくためにも、町産品の開発や磨き上げ、流通促進に繋がる新たな販売拠点施設の整備が望まれています。新たな販売拠点ができることで、チャレンジ精神が生まれやすくなり、新規参入者が見込まれ、後継者の確保・育成へも繋がり、ひいては雇用の確保も期待できます。

**卸売業・小売業 事業所数・従業者数・年間商品販売額** (単位：人、百万円)

年度	総数			卸売業			小売業		
	事業所数	従業者数	年間販売額	事業所数	従業者数	年間販売額	事業所数	従業者数	年間販売額
H 2 4	139	866	11,448	9	45	833	130	821	10,615
H 2 6	121	686	11,372	11	41	850	110	645	10,522
H 2 8	126	694	12,380	10	42	556	116	652	11,824

【図 2-4-3-① 卸売業・小売業 事業所数・従業者数・年間商品販売額】

(出典：商業統計、経済センサス-活動調査)

**製造業 事業所数・従業者数・製造品出荷額等 (従業員 4 人以上の事業所)**

(単位：実数、人、万円)

年度	事業所数	従業者数	出荷額等
H 2 6	17	267	311,979
H 2 7	18	263	316,406
H 2 8	19	339	453,782
H 2 9	18	374	512,034
H 3 0	16	354	517,073

【図 2-4-3-② 製造業 事業所数・従業者数・製造品出荷額等】

(出典：工業統計、経済センサス-活動調査)

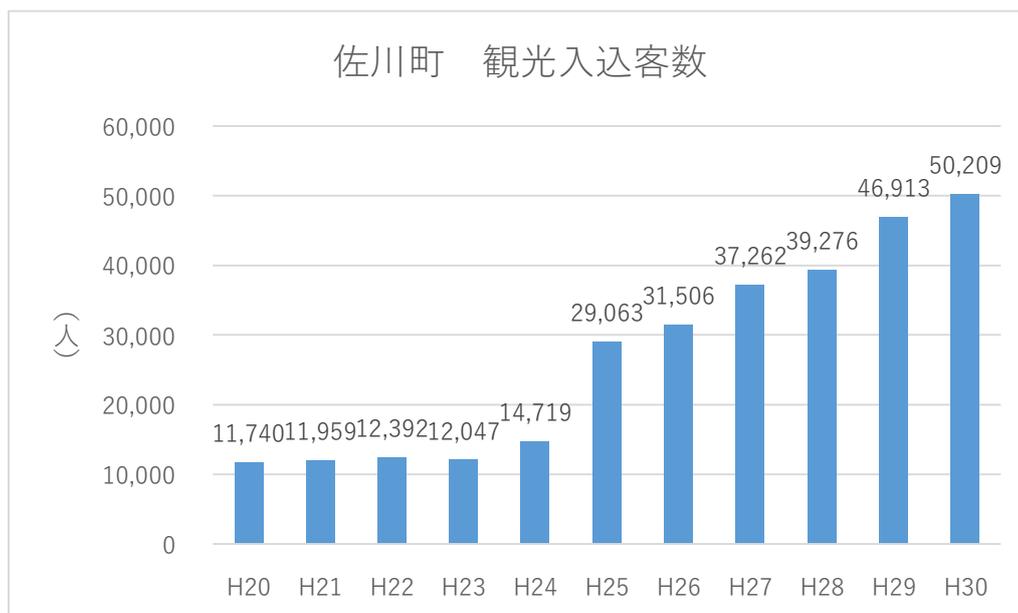
## 2.4.4 観光

佐川町には、牧野富太郎博士らを輩出した豊かな自然環境に加え、県下屈指の酒蔵や旧商家住宅を中心とした建造物が、歴史と文化を感じられる町並みを形成しています。酒蔵や歴史的建造物が建ち並ぶエリアは上町地区と呼ばれ、佐川の主要観光エリアとなっています。

上町地区では、平成25年に旧浜口家住宅を改築し、さかわ観光協会が観光案内窓口に加え、お土産販売やカフェ運営をしており、まち歩きの拠点として、多くの観光客をお迎えすることができるようになりました。通りには土佐酒を代表する司牡丹酒造の白壁の酒蔵や、国指定重要文化財である竹村家住宅など江戸時代の佇まいを伝える建造物が軒を連ね、風情ある落ちついた情緒を醸し出しています。まち歩きガイドも充実しており、県外から大型バスにて観光に来られる方も多く見られるようになり、平成25年度以降の観光客数は大幅に増加しています。令和2年度末には、佐川町と縁の深いJR客車を収容・展示する施設が完成予定で、情報発信・休憩機能やイベントスペースを兼ね備えた施設として、新たな集客の核として期待されています。

その他周辺には、日本の桜名所100選に選ばれ、高知を代表する花見どころでもあります牧野公園や、郷土出身の幕末の志士たちの書状など貴重な資料を多数展示している青山文庫、高知県下の地形・地質を紹介し、珍しい化石のコレクションを多数展示している佐川地質館などの観光施設があります。

しかしながら、観光客数が増加する一方で、町周辺部への周遊にはつながらず、観光資源を十分に生かせていない、大人数で食事できる店が限られている等により町内での滞在時間が伸びない、また、上町地区周辺では受け入れ体制や駐車場の確保に限界があるといった課題が生じています。佐川の魅力発信・情報発信の強化、大人数でも気軽に立ち寄れる食事処、上町地区や町周辺部への効果的な誘導等の核となる新たな観光拠点が求められています。



【図 2 - 4 - 4 佐川町の観光入込客数】

## 2.5 交通

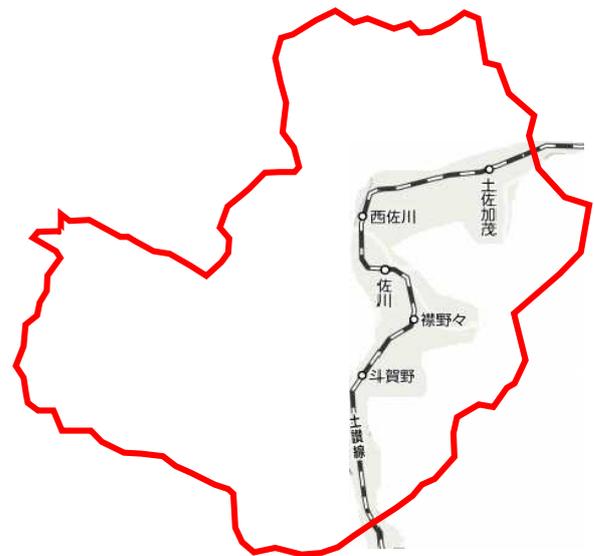
佐川町は、高知県と愛媛県を結ぶ国道33号が東西に走り、それに交差する形で南北にJR土讃線が走っています。町内には、土佐加茂駅、西佐川駅、佐川駅、襟野々駅、斗賀野駅の5つの駅があり、高知市等への通勤・通学に多く利用されています。高速道路については、隣接する自治体に高知自動車道があり、最寄りの須崎東ICまで国道494号経由で15分、伊野ICまでは国道33号経由で30分となっており、高知龍馬空港までは高知自動車道経由により、約1時間で連絡します。また、佐川町内においては、黒岩観光が運行する路線バスに加え、町コミュニティバスとして「さかわぐるぐるバス」を運行しており、町の中心部と周辺部を結ぶ路線など全9路線を運行しています。



【図 2 - 5 - ① 交通機関広域図】



【図 2 - 5 - ② 地域公共交通（ぐるぐるバス）】

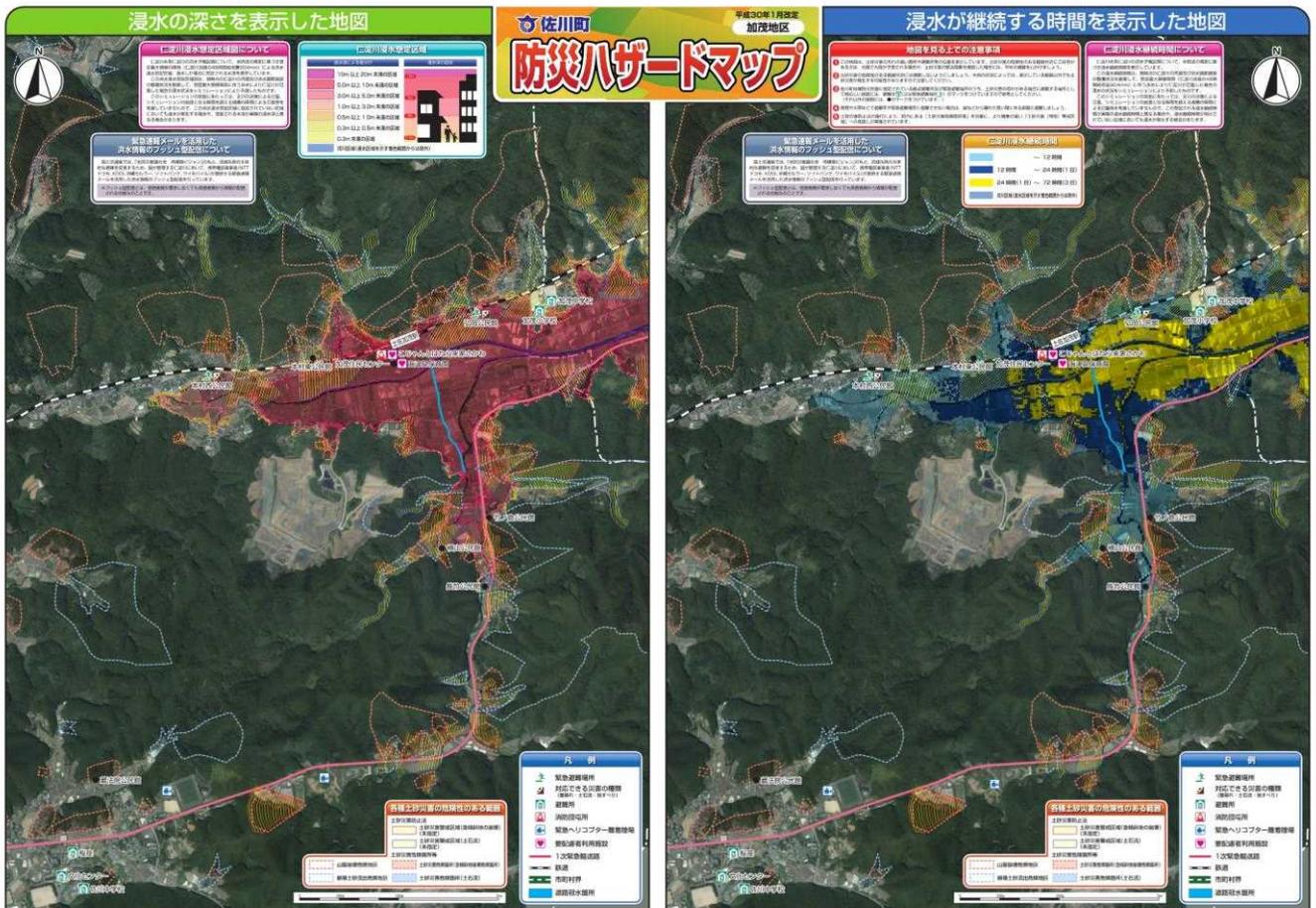


【図 2 - 5 - ③ 町内のJR土讃線】

## 2.6 防災

佐川町は古くから浸水被害に悩まされた地域であり、昭和50年の台風5号では、町中心部の約70%が水没し、東隣の日高村と同様に多くの土石流や山腹崩壊が発生し、甚大な被害を受けました。近年では、時間雨量50mmを超える短時間強雨や総雨量が千mmを超えるような大雨が発生し、全国各地で災害が発生しています。このような背景から、平成27年に水防法の一部が改正され、新たに想定最大規模の降雨を対象とした洪水浸水想定区域の指定などが義務付けられ、仁淀川等における洪水浸水想定区域が公表されています。また、本町は、日下川、柳瀬川、春日川等の数多くの中小河川の氾濫、土砂災害警戒区域等の危険箇所等の災害リスクを有していて、その対策が求められています。

また、30年以内の発生確率70～80%とされている南海トラフ巨大地震による佐川町の被害想定は、最大で震度7に達すると予測されています。その際、県の想定によると、倒壊や火災などにより被災する建物は1,400棟、死者数90人、負傷者数が760人となるほか、1日後の避難者数（避難所以外への避難も含む。）は、2,000人以上に上ると推計されています。こうした被災者への速やかな救援には、多くの人的・物的資源が必要となりますが、最大クラスの地震では、太平洋沿岸部が広域にわたって被災し、国道を始めとするインフラが破壊され、他の地域からの応援が簡単には得られない状況となることを想定しておく必要があります。加えて本町においては、自らが受けた被害への対応とともに、県沿岸部に対する後方支援地としての機能も同時に求められる可能性があり、この点にも留意する必要があります。



【図 2 - 6 佐川町防災ハザードマップ（加茂地区）】

## 2.7 施設立地

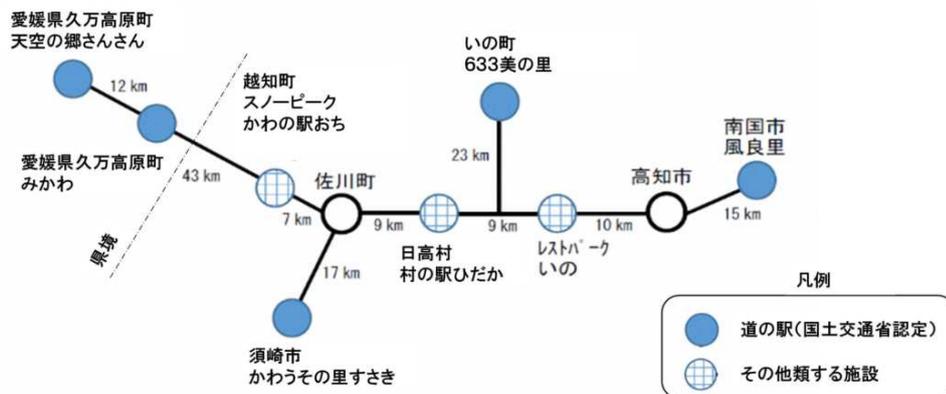
佐川町は、高知と松山を結ぶ国道33号、須崎方面と繋がる494号が交わるなど交通の要所でもあります。計画地（加茂・霧生関地区）は、国道33号沿いで周辺に民家はなく自然に囲まれた面積約2haの町有地で、現在、一部にヘリポートを設置し、霧生関防災拠点施設として活用しています。

国道33号は、昼夜にわたり多くの人流・物流交通を支えており、計画地付近の自動車類交通量（平成27年国土交通省道路局全国道路・街路交通情勢調査）は、約1万3千台/日となっています。しかしながら、現在、県内の国道33号沿い、国道494号沿いには道の駅が整備されていません。計画地から10km圏内に、類似施設はありますが、24時間利用できるトイレ等の休憩機能と情報発信機能を備えた道の駅は、道路利用者の利便性や安全性の向上に資する施設として利用需要が見込まれます。

また、計画地周辺の霧生関には、1800年頃から桜が植えられ、花の遊園地が作られていたことが記録に残っています。以来、佐川は今日まで「桜のまち」として広く知られるようになりました。現在、自伐型林業や牧野公園を核とした植物を通してのまちづくりを目指しているなかで、計画地は自然豊かで、木や植物を身近に感じてもらうことができ、町の玄関口として佐川らしさを演出できる場所となっています。



【図 2 - 7 - ① 高知県内道の駅（国土交通省四国地方整備局）】



【図 2 - 7 - ② 周辺施設環境】

## 2.8 その他資源等

佐川町には、多くの建造物、遺跡、寺社、民俗芸能などの文化財が保存・継承され、その多くが観光資源となっています。また、各地区で地域の特性を活かした祭やイベントが催され、地域内交流の活性化や交流人口の増加につながっています。平成30年度から、おんぱく手法を取り入れた体験型博覧会「わんさかわっしょい体験博（通称：わんぱく）」を実施し、観光客の誘致に加え、地域人材の育成、観光商品のテストマーケティングなど、多様な地域資源を活用する土台づくりが進んでいます。



乗台寺  
(土佐三大名園・県指定文化財)



青源寺



不動ガ岩屋洞窟遺跡  
(国指定重要文化財)



ナウマンカルスト



瑞応の盆踊り



四ツ白太刀踊り

(県指定文化財)



文殊大祭



えびす祭り



たらふく秋まつり



さかわ・酒蔵ロード劇場



地乳まつり



わんさかわっしょい体験博

### 3 道の駅の役割

#### 3.1 地域の課題と道の駅に期待する効果

道の駅を整備することにより期待できる、佐川町の地域課題を解決する効果として、その内容を「モノづくり（農産物や加工品の地産外商）」、「ヒトづくり（地域のつながり）」、「コトづくり（観光案内と情報）」の3つに分類してそれぞれ整理しました。

役割の分類	モノづくり (農産物、加工品)	ヒトづくり (地域のつながり)	コトづくり (観光案内、情報)
地域の課題 (現状)	<ul style="list-style-type: none"> <li>①農業産出額は一定維持されているものの、耕地面積や生産者は減少している</li> <li>②主に町内向け既存直販所の出荷者数、売上が減少している</li> <li>③佐川産の特色ある料理・土産を提供する場が少ない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①地域内での世代間交流や、各地区同士の交流が少なくなっている</li> <li>②親子連れが安心して楽しめる公園や広場が少ない</li> <li>③遠足など、悪天候時でも小さな子どもが遊べる場所が望まれている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①主要観光地である上町地区は、駐車場も少なく車の移動には不便である</li> <li>②主に通過型で滞在時間も短く、町中心部から各地区への流れが少ない</li> <li>③各地区のイベント情報の更なる集約と発信が必要</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>①新たな加工所・販売拠点ができ、生産拡大や新商品の開発など意欲向上に繋がるチャレンジの場となる</li> <li>②地産外商により生産者の所得が向上し、後継者・担い手育成に繋がる</li> <li>③佐川のおいしいもの（素材）を常時提供でき、PRできる場となる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①加工品販売等で集落活動センターとのネットワークが生まれ、地域間交流が盛んになる</li> <li>②木工体験や牧野植物探索など、地域資源を活用した体験プログラムを常に提供できる</li> <li>③交流広場や遊具、おもちゃ美術館が目的地となり、親子連れが訪れる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①道の駅を拠点とした、地域公共交通を使った観光周遊ルートの造成が可能となる</li> <li>②道の駅で長時間滞在してもらうことで、魅力の発信と経済波及効果が期待できる</li> <li>③道の駅から町内各所へ誘導する観光案内・情報発信拠点となる</li> </ul>
期待する効果 (将来)			

---

## 4 道の駅コンセプトと顧客ターゲット

### 4.1 道の駅コンセプト

道の駅のコンセプトは、施設の設置目的にもつながる「基本コンセプト」と、おもてなしの心につながる「運営コンセプト」に分けて整理します。

#### 4.1.1 基本コンセプト及び名称

道の駅基本構想では「ごちそう佐川」をコンセプトとしてまとめましたが、このキーワードは運営をする町民みんなのマインドと捉え、商品開発やおもてなしにつながる「運営コンセプト」として下記4.1.2にまとめました。

一方、道の駅開設の土台となる、佐川町の独自性や強みを表現する施設全体の「基本コンセプト」については、計画地の周辺環境や立地条件、また佐川町が進める幸せなまちづくりの根幹を考慮したうえで、佐川町の歴史をひもとき、昔と今をつなぐストーリーを基に検討を行いました。

その中で、佐川町の何万年もの長い歴史から生まれた地層、また佐川町の気候や風土が生んだ数々の偉人たち、その偉人の一人である牧野博士が愛してやまなかった植物、牧野博士が広めた見事な桜並木、その桜を中心とした草花を大事に育てている牧野公園、その牧野公園から広がる「まちまるごと植物園」構想など、「植物のまち」に多角的な視点からアプローチし、佐川町の自然と人の営みを道の駅という場所で表現できる基本コンセプトとして以下のようにまとめました。

#### 植物が中心にある町。

道の駅のネーミングは、町のコミュニケーションを生み出す原点となるもの。

これからの運営・展開を続けていく上で、大きな役割を果たすこととなります。

WORKSHOPにより佐川町の個性は「地質」「牧野」「林業」というキーワードが見えてきました。

これらの言葉は「野菜」「野草」「花」「森林」を連想し、「植物の時代」を示しています。

植物が中心にある町。草木に関心を寄せる町。は、あたらしい町のアイデンティティだと思います。

コロナ禍の後、偏り過ぎた人間の暮らしの考え方を少し考え直す時でもあると思います。

来訪者に土地のものを売るだけでなく、町民の豊かな生き方を表現できる場所として、道の駅の名前を「まきのさんの道の駅・佐川」とします。

---

まきのさんの  
道の駅  
佐川

※仮のデザインです

## CONCEPT

### この町のアイデンティティ

植物が中心にある町。  
草木に関心を寄せる町。  
来訪者に土地のものを売るだけでなく  
町民の豊かな生き方を表現できる場所。  
町の理念が漂う場所でありたい。  
生涯学習の場として位置付ける。

## 「まきのさんの道の駅・佐川」の展開（案）

### さかわ84の森

町民が自ら間伐する「自伐」により隣接する山の手入れをする。「人」と「森」が遠い関係にあるニッポン。「さかわ84の森」と名付け、人が散策する森を作る。

### 牧野公園

公園を散歩すれば、野の花の名前がわかる公園  
**Makipedia** を使いながら、野の花インストラクターが「まきのさんの野の花ツアー」を実施。

### まきのさんの花工房

牧野さんに困んだ四季折々の花を栽培し、全国に宅配便でお届けするまきのさんの「花便り」。花専門、宅配用のパッケージを開発し、宅配システムを作る。

### 酒蔵ウォーキング

酒蔵の風景がある美しい街並み「佐川」を歩く。84ひのきの1号升で、酒の気分で給水しよう！酒の本場で気分だけでも。

### 84DIY 工房

町内外の人が木の加工ができる工房  
さかわ発明ラボや民間企業の協力により木工加工関連のプロジェクトを構築し「おもちゃミュージアム」と運動させる。

### 84 おもちゃミュージアム

高知の84材を使ったおもちゃとなる。さらにミュージアムの意味が出てくるだろう  
おもちゃミュージアムの冒頭に84を付けたネーミングとした

### 雑草という名の植物はない デジタルアプリ Makipedia

佐川町で作るオリジナルアプリ  
QRコードで牧野植物の解説・ストーリーを閲覧できる。



## まきのさんの道の駅 佐川

### CONCEPT この町のアイデンティティ

植物が中心にある町。  
草木に関心を寄せる町。  
来訪者に土地のものを売るだけでなく町民の豊かな生き方を表現できる場所。  
町の理念が漂う場所でありたい。  
生涯学習の場として位置付ける。

### SDGs

国連採択17の目標SDGsは、当然ながら国の農政にも影響を与えている。「村の価値を認め合う社会」というフレーズが見られるようになった。  
佐川町の「植物を中心に考える町」は、まさにSDGsのベースの上にあるもの  
道の駅として後発であることのメリッットを生かして  
SDGsがベースにある構想としたい。

### 物販（佐川産）

地元産品が60%あれば全体印象が「佐川」産となる。ここが大事。仕入れ商品があるとしてもそのチャョイスに一定のガイドが必要！

### まきのさんの ごちそう（地層）シリーズ

特異な地質構造帯に位置する佐川に困んだブランド。ごちそうシリーズ。

■ごちそうサンド ■ごちそう鱈 ■ごちそうフライコ  
■ちそうクレーン ■山椒もち ■山椒みそなど。  
レベルアップが必要！

### まきのさんの台所（食堂）

「食べる場所」ではなく「作る場所」を養育ネーミングにすることで、牧野さんの研究のようにおいしさを生み出すワクワク感を、食堂のコンセプトにしたい。

■まきのさんのお弁当 ■まきのさんのいちごミルク  
■まきのさんのお惣菜 ■まきのさんのいちごミルク・生  
■まきのサンド ■まきのさんのグリーンソフト

### まきのさんの本棚

食堂の一角に、牧野さん関連の本、資料のコーナーを！  
ミュージアムシヨップ的なスペースの検討。  
牧野植物園の協力も。

### まきのさんの 野菜市場

いろいろな時代の地層や多様な植物野菜  
適地適菜の佐川。ケミカルを減らした野菜  
を物販のメインとして販売する。

### さかわ地質館 5億年前の地層

特異な地質構造帯に位置する佐川。  
大切なコンテンツだが、展開しにくい。  
ストイックな専門領域のコアなオーディエンスをうまく取り込み、特別な場所としてのイメージをむしろ積極的に出して行く。町が立体的になる。

---

#### 4.1.2 運営コンセプト

道の駅の運営コンセプトは、基本構想で示した「ごちそう佐川」とします。

地質学発祥の地ともよばれる本町は、日本列島の生い立ちを探る上できわめて重要な地域として古くから研究が進められ、佐川盆地の地層からは、地球の歴史を感じることができます。

町内を見渡せば、その地層のごとく米をはじめ四季を感じることのできる豊かな農産物、地酒や地乳（ぢちち）など特色ある加工品、豊富な山林資源と牧野富太郎博士ゆかりの植物、そして多くの偉人を輩出した独自の教育と文化など、特色ある地域の資源が多彩に折り重なり根付いています。

また、「ごちそう」の語源となっている「ちそう（馳走）」とは、客人をもてなすために四方を走り回って、地域の美味しいモノ、おもてなしの品を集めることを意味します。ここでいう「ごちそう」とは、物質的なモノだけでなく、もてなすための行動や心情であり私たちに息づく「おもてなしの心」を意味します。

運営コンセプト「ごちそう佐川」の考え方は、町民が町外からのお客様を精一杯心をこめておもてなしする「ごちそう」であり、生産者が消費者を美味しいものでおもてなしする「ごちそう」でもあり、また施設管理者のスタッフが施設利用者を日頃の感謝を込めておもてなしする「ごちそう」でもあります。

そのような思いを込めた「ごちそう佐川」のコンセプトが、まちづくりの基本姿勢である”チームさかわ まじめに、おもしろく。”と結びつき、おもてなしをする側のすべての町民の“魂“であり続ける、みんなの道の駅を目指します。

## 4.2 ターゲット設定

ドライバーが気軽に立ち寄ることのできる環境を整備し、施設前面の道路（国道33号）通行者の誘客を図ります。あわせて、子どもから高齢者まで幅広い客層が同伴すると想定される、30歳から40歳代で長時間滞在することを目的としたファミリー層、女性層をターゲットとします。また、本町の「ごちそう」を活かした飽きのこない事業を展開し、リピータの獲得を目指すとともに、ソーシャルネットワークの活用により、若者を中心とした潜在的顧客の開拓につなげます。

### 4.2.1 入込客数の予測

本事業の顧客マーケット及び入込客数は、利用目的や地域などをもとに次のように仕分けを行いました。

項目	顧客マーケット	入込客数 (年間)
①交通	年間 約396.6万人 国道33号（日高村・佐川町境）平日昼間12時間の交通量10,867台に365日を乗じて算出。自動車1台あたり1名の乗車と仮定、休日交通量を勘案しない。	約35.6万人 左記により、顧客マーケットに立寄率9%（既存道の駅等の入込客数/通行量）を乗じて算出。
②町民	約1.3万人 本町の人口（平成27年度国勢調査）。	約3.9万人 町民のうち半数が年間6回、利用するとして算出。
③観光	年間 約5.0万人 町内の観光等施設の入込客数実績（平成30年度）。	約3.1万人 左記のうち、さかわ観光協会の入込客数実績により算出。
④誘致	約130.5万人 本町から自動車で2時間圏内の市町村人口により算出。	約43.5万人 左記により、本町と同様（交通量、立寄率、施設規模）の既存道の駅の入込客数により算出。
⑤おもちゃ美術館	約20.3万人 本町から自動車で2時間圏内の市町村人口のうち0歳～9歳までの人口に2を乗じて算出。	約4.0万人 山口県長門おもちゃ美術館の開館年度入込客数により算出。 ※左記により算出した長門おもちゃ美術館の顧客マーケットは約12.4万人。

---

## 4.2.2 入込客数の目標

「①交通」から算出した入込客数は、約35.6万人で施設の立地条件によるものです。交通量については、平成27年度に実施された道路交通センサスを基礎数値としていることから、現在の交通量と若干の差違はあるものの、精度は高いと思われます。また、入込客数の算出にあたり適用している立寄率については、周辺の道の駅等の現状により算出しています。

「②町民」及び「③観光」の入込客数については、概ね「①交通」に含まれると考えられるものの、リピート率をあげることで顧客数の底上げにつながります。

「④誘致」については、愛媛県松山市までを誘致圏域としており、約130.5万人の顧客マーケットがあります。本町と同様（交通量、立寄率、施設規模）の施設と考えられる、「かわうその里すさき」「あぐり窪川」の誘致圏域人口－約90万人、入込客数－約30万人であることを勘案すると、約43.5万人の入込客が期待できます。しかし、誘致圏域による算定は、潜在人口に対するものであることから、知名度や魅力度が集客率に反映されるため、不確定要素が大きいと考えられます。「おもてなし」の磨き上げ、PRが重要となります。

「⑤おもちゃ美術館」は、四国内に同様の施設がないことから、誘致圏域外においても一定の集客が期待できます。特に子育て世代、ファミリー層の集客を見込むことができ、他施設との差別化が図られます。

上記、顧客マーケット及び入込客数をもとに、次のように入込客数の目標を設定します。

「①交通」や「④誘致」の入込客数予測によると、35万人から40万人程度を集客できる素地があると考えられます。また、おもちゃ美術館を併設することで、従来の道の駅のターゲットと異なる客層、幅広い地域の集客が期待できます。このようなことから、入込客数の目標を年間40万人とします。

---

## 5 備えるべき機能

### 5.1 休憩機能

国土交通省と協議しながら、次の整備を進めます。

#### 5.1.1 駐車場施設

24時間無料で利用できる駐車場を整備します。すべての利用者にとって安全でわかりやすく、駐車しやすい駐車場とするために、次のことを検討します。

- ・集客施設の入込客に十分対応できる駐車規模を想定し、ユニバーサルデザインに配慮した誰もが停めやすいゆとりある駐車スペースを確保します。
- ・電気自動車用充電施設を設置します。
- ・二輪利用者や自転車利用者が利用しやすいように、十分な専用スペースを設置します。
- ・コミュニティバスの停留所を設置します。
- ・駐車場としてだけでなく、イベント開催時等は多目的に利用します。
- ・災害発生時には、道路利用者の一時避難所や復旧活動の輸送中継基地等として活用します。

#### 5.1.2 トイレ施設

24時間無料で利用できるトイレを整備します。道路利用者をはじめ、道の駅を訪れた誰もが快適に利用できる清潔なトイレとするために、十分な個数を設置し、ユニバーサルデザインに配慮したつくりとします。また、オストメイト対応トイレやおむつ替えスペース、ベビーチェア、子ども用トイレ等を整えた多機能トイレを整備します。

#### 5.1.3 休憩施設

利用者がゆっくりと快適に休憩できる無料休憩所を整備します。利用しやすく、ユニバーサルデザインに配慮した配置を念頭に、滞在時間を延ばす空間となるよう工夫します。屋外の休憩施設については、自然を肌で感じてもらう癒やしの空間、イベントスペースを眺めながらゆっくり飲食・休憩できる空間となるような工夫を施します。

### 5.2 情報発信機能

国土交通省と協議しながら、道の駅情報、道路交通情報、観光情報、災害情報、集落活動センター情報等を提供・紹介するコーナーを整備します。

また、佐川町との出会いの場としての地域情報の発信拠点づくりを目指し、地域振興や定住化につながるような地域の魅力（歴史・文化・人・植物・地質・特産品・自伐型林業など町の取組等）を発信します。

更に広域的情報発信として、仁淀川流域市町村や（一社）仁淀ブルー観光協議会、その他近隣施設との連携を図り、利用者が快適に不自由なく道路情報、国道33号沿い及び流域の観光情報、道の駅情報等を得られる環境づくりを目指します。

---

## 5.3 地域連携機能

### 5.3.1 来場者を馳走して、もてなす機能

町内では、寒暖差のある気候を生かした四季折々の美味しい野菜や果物が数多く栽培されており、加工品では、地酒・地乳・うなぎなどの伝統ある商品がある一方で、シフォン・ベーグル・チョコレートなどの新たな商品もあり、利用者のお腹を満たすご馳走がたくさん作られています。

また、歴史に触れることができる上町地区や、牧野博士ゆかりの植物に癒される牧野公園など、利用者の心を満たすことができる資源も数多くあります。

町内だけでなく仁淀川流域の拠点として、関係施設と連携を図り、流域商品等も一括して発信していくなど流域の拠点としての道の駅づくりを目指し、利用者が心身ともに満足していただける次のおもてなし機能を設けます

#### 【たべる（食）】

地域内の食材と地元の作り手による郷土料理を中心とした食事、地元食材を使ったサンドイッチや焼き菓子などの加工品を気軽に食べていただけるスペースを設置します。食事の提供にあたっては、観光バスの受け入れや一度に多くのお客様の利用を想定した整備規模とし、「いつでも」「だれでも」おもてなしできる体制を構築します。

また、日本茶インストラクターによる佐川茶の提供など佐川の食材や食文化のポテンシャルを最大限に活かしたPRなども併せて実施します。

#### 【かう（市）】

町内で生産された新鮮な農産物やお弁当などの加工品が買える直販や、佐川らしい既存商品（地酒、地乳、牧野グッズなど）や磨き上げによりリニューアルした商品、ごちそうシリーズ等の新商品の開発もすすめ、わざわざ買いに来たくなる商品を揃えた土産コーナーを設置します。

また、遠方の方が気軽に再購入できるようにネット販売やふるさと納税の導入等もすすめていきます。

#### 【みる（観）】

関係機関と連携し、多様な情報発信を行うことで、着地型観光のハブ機能を持たせます。道の駅で、上町地区、商店街、各集落活動センターなどの紹介を積極的に行い、町内全体への誘客を図ります。

また、ツアーやワークショップなど佐川の魅力を体験できる機会を創出するなど、一日では終われない佐川のおもてなし観光を実施します。

### 5.3.2 町民・来場者が長時間楽しめる機能

幅広い世代・地域の来場者が、飽きることなく長時間滞在できる無料・有料の施設を整備します。整備にあたっては、本町の「モノ」「ヒト」「コト」を体感できる設計とし、「子育てしやすいまち」としてファミリー層が安心してゆっくり楽しむことができる施設を目指します。また、上町や商店街はもとより各地域においても来場者が楽しめるプログラムを構築し、道の駅の波及効果を佐川町全域に広げます。

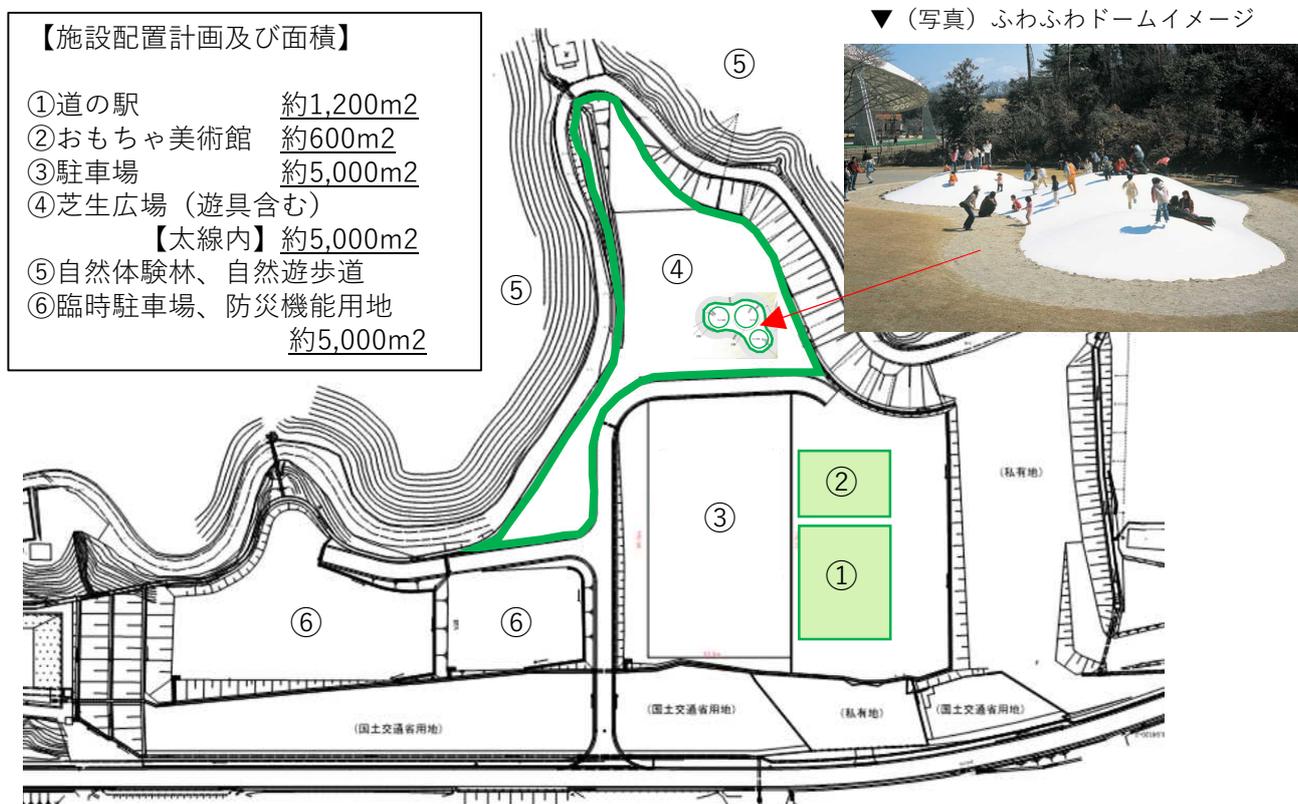
#### (1) 公園

隣接する山林と一体的に整備（遊歩道、自伐型林業モデル林、山遊びできる環境等）することで、自然を体感・楽しむことのできる公園とし、子どもが安全に遊べる空間を整備します。また、公園内には子ども向けの遊具や設備を整備するとともに、保護者等の見守り環境に配慮した設計とします。

また、牧野公園に代表される「桜」は佐川町民にとって最もなじみの深い花の一つであると言え、建設予定地の霧生関には歴史的な由来があることから、公園内や施設周辺には桜はもちろん、四季を彩る花や樹木を植栽整備し、自然や生き物とのふれあいを楽しめる安らぎの公園・空間を整備します。

#### (2) 交流広場

道の駅施設の周辺には、マルシェやフリーマーケットなど様々な催しが開催できる多目的広場を整備します。また、宿泊機能としてキャンプのできる広場の整備を検討します。



【図 5 - 3 公園機能等配置計画】

---

### (3) 着地型観光ハブ機能

地域の魅力やイベント情報を発信・紹介する専用ブースを設置します。

来客用駐車場に限りのある、上町地区や商店街への誘客を図るため、レンタサイクルを検討するとともに、地域観光・地域巡遊マップを作成します。また、「さかわぐるぐるバス」の停留所を整備します。

### (4) 多目的室（スペース）

町民が主体となって開催する研修や発表会、レクリエーションに活用できる多目的室を整備します。また、来場客が気軽に参加できる体験プログラムやワークショップを定期的で開催するとともに、さかわ観光協会の「わんさかわっしょい体験博」や「まち歩き」、さかわ発明ラボのワークショップ、牧野公園ガイドなど、既存の取り組みと連携し、積極的に地域資源（植物、山林、地乳、農産物等）、地域人材を活用します。

### (5) おもちゃ美術館

天候に影響されることなく、親子・多世代交流ができる場として、東京おもちゃ美術館の監修による、「さかわおもちゃ美術館（仮称）」を併設整備します。施設及び設備には、可能な限り町産木材を使用し、子育て世代に配慮した空間づくりを行います。

---

### 5.3.3 出品者・参加者を応援する機能

道の駅の運営コンセプト「ごちそう佐川」を展開するために、多くの出品者や参加者に関わっていただき佐川の特産品が揃い、ここに来たら買える販売の拠点と、地元のを活かした新たな商品の開発の拠点となる必要があります。また、地域の特産品や加工品など「佐川ブランド」を町内外に発信・販売する機能を備えることにより、出品者・参加者を応援する機能を設けます。

#### (1) 地元特産品の販売

本町では、稲作や露地野菜を中心に園芸・果樹の栽培、酪農などが盛んであり、中山間地の地形を生かした茶やショウガ、栗の栽培がされています。また、「山椒もち」「地酒」「うなぎ」「地乳商品」などの佐川の伝統の味や、加工グループや個人で加工販売しているたくさんの加工商品があります。

それらの豊富な農産物や佐川ならではの食文化をはじめとした多くのおいしいものを販売し、地元特産品の販売拠点とします。

##### 【機能例】

- ・地域で採れた新鮮な農産物の直売
- ・地元食材を活用したここでしか買えない特産品・加工品等の販売
- ・旬の時期に行うイベント販売や、地元加工者が特産品を販売できる場の提供
- ・地元生産者・加工者や集落活動センターなどが出店するマルシェの開催

#### (2) 地元のを活かしたオリジナル商品の開発

町内産品を活用した新たな加工品やお土産品などの新商品開発を応援するため、地元生産者・加工者等が試作品をつくることのできる加工施設を整備し新たな商品の開発の拠点とします。

##### 【機能例】

- ・地元食材を使った加工品や土産品などを試作制作できる加工施設整備

#### (3) 町外への外商の拠点

佐川町商品の販路拡大につながる外商機能の拠点とします。

##### 【機能例】

- ・ギフト商品の企画・カタログ制作、ふるさと納税の商品企画や特産品の営業などの地域産品外商拠点
- ・インターネットによる販売やふるさと納税品の発送などの地域産品の情報発信・PRの拠点
- ・佐川町に来て地元食材等に触れて佐川ファンになっていただく、農林業体験等の企画・発信

## 5.4 防災拠点機能

近年の大地震等の大規模災害時には全国の道の駅が拠点施設として活用されている事例を踏まえ、本町の道の駅も防災拠点としての機能を付加します。

まず、災害応急対応の段階を想定し、道路利用者や周辺住民の緊急一時避難場所としての機能（貯水槽や非常用電源の確保）や、町内全域への救援物資の保管機能（食料、生活日用品等の防災用備蓄倉庫）の整備について、管理運営組織との連携も含め検討を行います。

また、復旧対応の段階では、広大な敷地の一部活用と国道33号に隣接した立地条件を生かし、警察・消防・自衛隊の広域活動拠点や救援物資の中継等を行う「防災道の駅」制度について、今後の国・県からの設置要請や制度の動向も踏まえ、霧生関防災拠点施設の既定の位置づけを基に検討を行います。

### ■ 防災拠点整備例 道の駅「みかも」(栃木県)



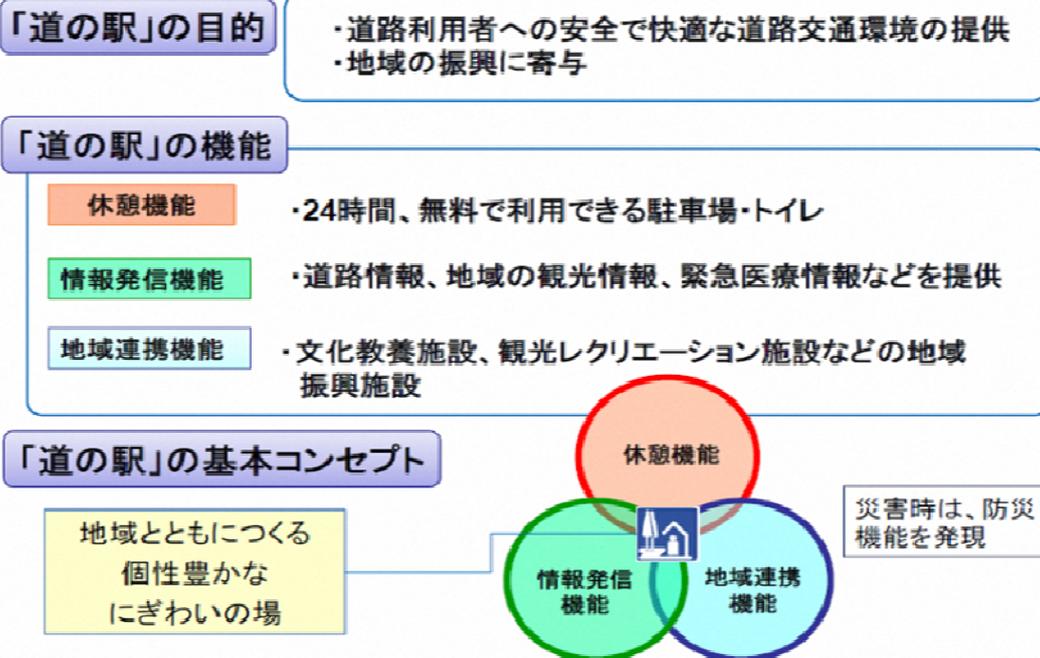
【図5-4 防災拠点整備モデル 道の駅「みかも」(栃木県) 出典：国土交通省】

## 5.5 参考資料

### 5.5.1 制度としての道の駅機能

#### 「道の駅」の目的と機能

国土交通省



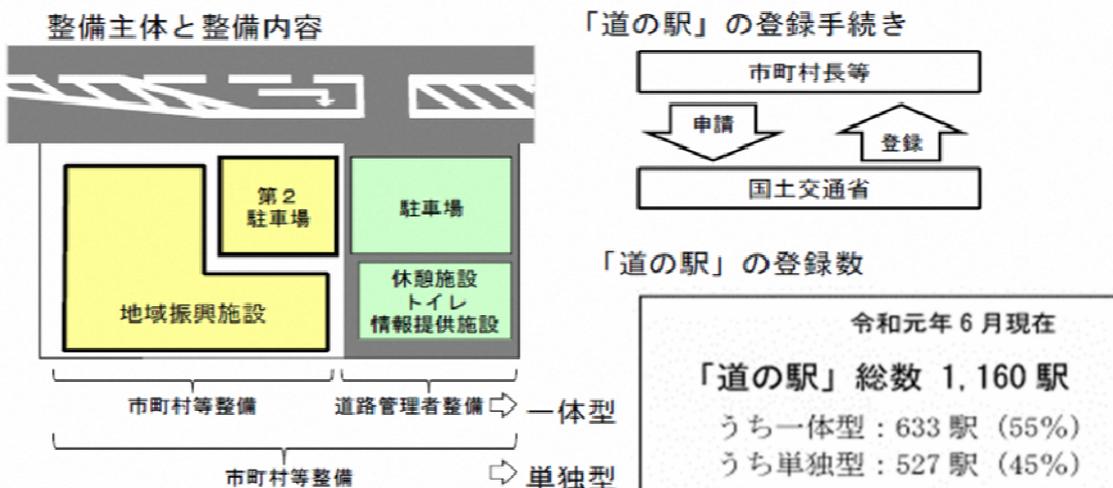
【図 5-5-1 道の駅概要 出典：国土交通省】

### 5.5.2 道の駅整備方式

#### 「道の駅」の設置者、登録方法

国土交通省

- 「道の駅」は、市町村又はそれに代わり得る公的な団体が設置
- 登録は、市町村長からの登録申請により、国土交通省で登録
- 整備の方法は、道路管理者と市町村長等で整備する「一体型」と市町村で全て整備を行う「単独型」の2種類



【図 5-5-2 道の駅概要 出典：国土交通省】

## 6 整備する施設・規模

### 6.1 整備する施設・規模

道の駅に求められる機能・施設の検討結果を踏まえ、基本計画においては次の導入施設・規模を想定します。

機能	施設	規模 (㎡)
かう (市)	産直・物販	約350
	加工所	約100
たべる (食)	食堂・レストラン	約350
みる (観)	観光案内所	約200
	共有スペース	
	ものづくり体験	
管理・ 運営	事務所・倉庫等	約200
休憩	トイレ・駐車場(24時間無料) 道路情報発信 コミュニティバス停留所 無料休憩所	—
防災拠点	ヘリポート等	—
長時間 楽しめる	おもちゃ美術館	約600
	公園・交流広場	—
	合計	約1,800

【図6-1 整備する施設・規模】

## 6.2 規模の算定

規模の算定においては、近隣道の駅の事例を参考に、施設規模の想定を行いました。

	機能	床面積	駐車場規模	入込客数（H30年） ※H30年県外観光客入込・ 動態調査 （高知県観光政策課）他
村の駅ひだか	産直 加工所 喫茶 観光 事務室	約200㎡ 約50㎡ 約50㎡ 約30㎡ 約40㎡	大型1台 普通車66台	202,219人
道の駅なかとさ	直販店舗棟 テナント店舗 1階延べ床面積	約500㎡ 約700㎡ 約1,200㎡	大型3台 普通車72台 (身障者4台)	280,550人
かわうその里すさき	1F物産館 (テナント等含む) 2Fレストラン等 延べ床面積	約900㎡ 約800㎡ 約1,700㎡	大型9台 普通車101台 (身障者5台)	364,137人
あぐり窪川	物産館 うちレストラン うち物販 うち情報・倉庫等 フリーマーケット棟 加工施設	約100㎡ 約200㎡ 約300㎡ 約300㎡ 約300㎡	大型5台 普通車83台 (身障者5台)	319,889人

## 7 配置計画

### 7.1 施設配置

道の駅とおもちゃ美術館の配置について、基本構想にある「施設一体型（併設含む）」と「山側型」について、来客者の利便性、運営効率、敷地の観点から表のとおりメリットとデメリットを整理しましたが、一体型（併設含む）の場合、デザインを統一するの必要はありますが、利用者側・運営側共にメリットが多いと判断しました。

また、予定地の敷地が広大であるため一体として整備をすることで、閑散としたイメージを防ぐこともできるため、施設一体型で検討を進めます。

その他の施設は、24時間利用できるトイレと駐車場及び交通情報は国土交通省の敷地で配置し、公園や交流広場は町有地で配置しますが、詳細の場所については、歩行者の安全、車両の動線等を考慮しながら今後検討していきます。

	施設一体型	山側型
利便性	○ 施設が隣接することで、来客者が一体的に利用できる。	× 施設間の移動が必要になる。 特に雨の日が不便
	○ 乳幼児用の施設（機能）等を供用できる	× 乳幼児用の施設等を両方に整備しなければ不便となる
	○ 施設間の通路に屋根を設置することで、雨の日でも移動しやすい	
敷地	△ 統一がとれたデザインが必要となる	○ 施設が離れることで、それぞれ特徴を持ったデザインが可能となる
	○ 山側に広いスペースを確保することができる。	○ 山が近い木を活かした佐川らしい展開がしやすい
		× 敷地面積が広く、分散することで閑散としたイメージになる × 日当たりが悪く、水路があるため湿気が多い
運営効率	○ 隣接することで維持管理しやすい。	× スタッフの動線が長くなり効率が悪い

○メリット、 ×デメリット、 △どちらともいえない

---

## 7.2 動線

道の駅の動線については、ドライバーと歩行者の安全に配慮し、関係機関と協議のうえ、次のように整理します。

### 【車両（自動車、二輪車）】

#### ■施設外

国道33号からアクセスします。入口が勾配のあるカーブとなっているため、ドライバーが視認しやすい表示を検討します。

#### ■施設内

現状の道路をそのまま利用する場合は、幅員が狭いため、大型車と普通自動車等の動線が交錯しないように車両動線を計画します。

また、一般車両と道の駅関係車両の動線も交錯しないように分けることができないか検討します。

### 【歩行者】

#### ■施設外

国道33号から来場できるようにします。また、敷地南側の町道からのアクセスについても検討します。

#### ■施設内

路面へのマーキング等により車道と歩道を分離します。車道を横断する場所は、歩行者が安全に横断できるよう計画します。

また、関係施設及び施設間を結ぶ主要経路はバリアフリー化を図ります。

## 8 景観・意匠計画

### 8.1 トータルデザイン

道の駅をデザインするにあたり重要になってくるのは、道の駅の名称、建築物（外観、内装、設備関係）、案内表示（サイン）、製品及びパッケージ等が考えられます。これらを個別にデザインすることなく、より良い空間づくり、統一感、整合性のとれたデザインを目指し、一体的に管理するのが「トータルデザイン」の考え方です。

佐川町の道の駅におけるトータルデザインについては、基本構想で示したコンセプトである「ごちそう佐川」をおもてなしの心のベースとし、これを踏まえ、計画地である加茂地区の周辺環境や立地条件、また佐川町の持つ強みやカラーも考慮しつつ、検討を行いました。

そうした場合、佐川町の持つ独自性と強みである「植物のまち」のキーワードが自然豊かな計画地の周辺環境にも合致しており、佐川町が目指すまちづくりの世界観とも違和感ないと言えます。またその方向性は、町民にとってもなじみ深い「牧野富太郎の生誕地」ともリンクし、地元から愛され、観光客からもイメージしやすいトータルデザインとなる可能性を秘めています。

よって、「植物が中心にある町。」佐川町、その町の玄関口としてみんなから愛される「まきのさんの道の駅・佐川」、この基本コンセプトと施設名称を踏まえ、全体で調和の取れた景観・意匠計画を今後検討します。

【道の駅】お茶の京都  
みなみやましろ村



【図8-1 トータルデザイン例（道の駅お茶の京都みなみやましろ村）】  
（株）四万十ドラマ提供資料

---

## 9 事業手法

### 9.1 整備手法

道の駅は、施設の利益向上を目的とするものではなく、町内の生産者、事業者、町民に幅広く様々な効果をもたらす役目を担います。

例えば、佐川のご馳走である農産物や加工品の新たな販売拠点となることで、参入機会創出による意欲向上や新規顧客獲得による消費拡大で生産者の所得向上につなげることが出来ます。

また、上手く情報発信することで、商店街や上町をはじめとする観光名所への誘導や、季節で催される町内の祭りや体験型観光わんぱくなどへ参加を促すことが可能となり、たまたま訪れた道の駅利用者を町内各地へつなげ町全体の活性化を図ることが出来ます。

さらに、ごちそう佐川は食べ物だけではなく、佐川町に来られた方をおもてなしする人（心）も大切に、関係する方々のつながりと広がりでおこなせる「佐川だから出来る」「佐川でしか出来ない」ごちそうをみんなで創造していくことが出来ますし、町民の憩いの場や町民同士の交流の場ともなり得ます。

こうした目的を実現するための施設であること、また、道の駅利用者が「また来たくなる」仕掛けにより、一度訪れた人がリピーターへ、さらに佐川ファンになっていただくための拠点施設として、町民がやりがい、生きがい、安らぎを得られる施設を目指すものであることから町が主体的に整備することとします。

### 9.2 管理運営手法及び主体

想定される3つの運営手法（直営、業務委託、指定管理）について、「財政負担（ランニングコスト縮減）」、「事業リスク（町の負担リスクの低減）」、「サービス向上（民間ノウハウの活用度・自由度、行政意向との連携）」の視点から特徴を整理し、比較検討しました。

民間事業者の関わり方（事業手法Ⅲ＞Ⅱ＞Ⅰ）が増すほど、「ランニングコスト縮減」、「財政負担の平準化」、「町の負担リスクの低減」、「民間ノウハウの活用度・自由度」といった点で、直営方式よりもメリットが増しますが、「行政意向との連携」といった点ではデメリットとなる傾向があります。ただ、第3セクターにすることで町の意向は反映しやすくなり、デメリットを解消することができます。

県内の道の駅では、第三セクターによる指定管理を採用している場合が大半となっています。

当町も、施設を整備する目的に沿った運営と民間ノウハウを活かすことが期待できるため、町が主体となる第三セクターを設立し、指定管理方式による管理運営を行うこととします。

事業手法		財政負担	事業リスク	サービス向上	
		ランニングコスト 縮減	町の負担 リスクの低減	民間ノウハウの 活用度・自由度	行政意向との連携
I	直営 方式	民間ノウハウが活用できないため、ランニングコスト縮減は望めない	町がすべてのリスクを負担する	民間ノウハウが活用できない	町が直営にて運営・維持管理を行うため、行政意向を直接反映できる
		△	△	△	◎
II	委託方式 (第三セクター)	運営・維持管理において、委託の範囲内において民間ノウハウが発揮されるため、ランニングコスト縮減が多少期待できる	業務委託は、町が作成する契約書や仕様書に基づくため、町がすべてのリスクを負担する	運営・維持管理において、民間ノウハウが発揮できるが委託範囲内に限られる(第三セクターの場合は組織構成による)	町が出資する第三セクターによる運営のため、行政意向と連携しやすい
	委託方式 (民間)				民間による運営のため、公共機能や役割等が希薄になりやすく、行政意向と連携しにくい
		○	△	△	△
III	指定管理 (第三セクター)	運営・維持管理において、民間ノウハウが発揮されるため、ランニングコスト縮減が一定程度期待できる	指定管理は条例に定められた管理等を代行するもので、運営・維持管理については、リスク分担ができる	設置目的に沿った範囲で、運営・維持管理が可能であるほか、自主事業の実施等もできるため、民間ノウハウが発揮できる(第三セクターの場合は組織構成による)	町が設置目的を達成するために出資する第三セクターによる運営のため、行政意向と連携しやすい
	指定管理 (民間)				民間による運営のため、公共機能や役割等が希薄になりやすく、行政意向と連携しにくい
		○	○	○	△

【図9-2 事業手法の特徴】

---

### 9.3 運営体制

道の駅の目的である、町内の生産者、事業者の所得向上及び町民のやってみようという意欲を喚起することや、統一のコンセプトにより販売、加工、外商などの機能を効果的に発揮するためには第三セクターによる一体的運営が望ましいと考えられます。

このため、市（かう）、食（たべる）については出店者が限られるテナント方式ではなく、直営を基本とします。ただし、町内事業者の意向やこれまでの実績を考慮して、道の駅の目的に合致するとともに、事業者の意欲が一層高まると判断される場合にはテナント方式も検討していきます。

なお、多目的スペースなどを活用して、個々の事業者が催事として出店することや新規事業者がチャレンジできる機会を設けることとします。

## 10 収支計画

### 10.1 整備事業費

整備事業費は前記6の施設規模を基に算出しました。なお、施設内に物販、加工所、飲食、案内所、多目的室など異なる機能・設備がありますが、基本計画の段階では他事例等を参考に算出します。

施設	規模 (㎡)	事業費 (千円)
設計・監理委託費	一式	50,000
道の駅建設費 (国土交通省整備分・防災用施設除く)	1,200	500,000
おもちゃ美術館整備費 (内装・おもちゃの設計から製作費等)	600	82,000
その他設備工事費	一式	100,000
合計	1,800	732,000

### 10.2 財源確保対策

町財政への一時的負担及び将来負担を軽減し、安定的な行政サービスを提供するため、下記の表にある主な特定財源を主として有効に活用することとします。

	名称	所管	補助率・上限	活用事例
1	地方創生推進交付金（まち・ひと・しごと創生交付金）	内閣府	1/2	・観光の振興、農林業の振興に資する施設整備等
2	社会資本整備総合交付金	国土交通省	事業費に対して概ね4割 (交付金の額は一定の算定方法により算出)	・地域交流センター、観光交流センター、まちおこしセンター等の整備
3	農山漁村振興交付金	農林水産省	1/2	・直売施設の整備等
4	中山間地域所得向上支援事業交付金	農林水産省	1/2	・直売施設や加工施設等の整備
5	高知県産業振興推進総合支援事業費補助金	高知県	1/2等 上限5,000万円 (※拠点加算上限5,000万円)	・道の駅施設整備（道の駅なかとさ、村の駅ひだか、なぶら土佐佐賀等実績あり）
6	辺地対策事業債（地方債）	総務省	充当率100% 交付税算入率80%	加茂辺地における公共施設整備等

### 10.3 運営収支計画

道の駅の運営収支について次のとおり算出しました。

- (1) 近隣道の駅等の物販販売状況の比較検討
- (2) (1)により物販販売面積 1 m<sup>2</sup>あたり500千円の売上と想定
- (3) 収入及び支出の各科目については近隣道の駅等の状況を勘案し算出

おもちゃ美術館の運営収支について次のとおり算出しました。

- (1) 長門おもちゃ美術館の収支状況及び入館者数内訳（市内・市外）の検証
- (2) (1)をふまえ入館者数4万人（うち町内0.4万人、町外3.6万人）を想定
- (3) 入館者数の割合は大人1：子ども1と仮定
- (4) 入館料は町内大人500円・子ども200円、町外大人800円・子ども500円を想定

		科目		金額 (千円)	備考
収入	道の駅	物販売上	産直・物販施設	175,000	500千円×350m <sup>2</sup>
		飲食店売上	食堂・レストラン	80,000	
		外商売上	屋台出店等	20,000	
		体験機能売上	ものづくり等		
		貸出施設収入	貸スペース等		
		指定管理料	公益的部分施設管理	10,000	
	おもちゃ美術館	入館料	施設入館料	24,800	
		物販売上	おもちゃ売上	5,000	
		指定管理料	公益的部分施設管理	3,000	
	収入合計				317,800
支出	道の駅	売上原価	農畜産物、商工品、仕入品	165,000	収入（指定管理料を除く）の60%
		人件費	給与・賞与・賃金等	65,000	
		その他一般管理費	水道光熱費・修繕費・維持費・消耗品費・販促費等	45,000	
		指定管理費	公益的部分施設管理	10,000	
	おもちゃ美術館	売上原価	おもちゃ等	3,000	物販収入の60%
		管理費	人件費・光熱水費、修繕費、維持費等	29,800	
	支出合計				317,800

## 11 事業スケジュール

道の駅は令和4年度の開業を目指し、関係機関等と協議をしながら進めます。

### 11.1 整備スケジュール

	令和元年度 (2019)			令和2年度 (2020)				令和3年度 (2021)				令和4年度 (2022)				令和5年度 (2023)		
	7	10	1	4	7	10	1	4	7	10	1	4	7	10	1			
基本構想・計画	基本構想策定			基本計画策定														
調査・設計				地盤調査・基本設計・詳細設計														
施設整備工事								土木建築工事										
関係機関協議				道路管理者等関係機関との協議 (国土交通省、高知県、警察、消防ほか)														

### 11.2 運営スケジュール

	令和元年度 (2019)			令和2年度 (2020)				令和3年度 (2021)				令和4年度 (2022)				令和5年度 (2023)		
	7	10	1	4	7	10	1	4	7	10	1	4	7	10	1			
管理運営組織				運営組織設立準備				運営法人設立 責任者決定				スタッフ募集				研修 開業準備		
												開業				管理・運営		

### 11.3 店舗等機能スケジュール

	令和元年度 (2019)			令和2年度 (2020)				令和3年度 (2021)				令和4年度 (2022)				令和5年度 (2023)		
	7	10	1	4	7	10	1	4	7	10	1	4	7	10	1			
物販・飲食・観光				運営(営業)形態、体制の検討、参加(協力)事業者の確保 地域素材掘り起こし、事業者説明及び契約締結、メニュー開発、店舗準備								店舗準備				営業開始		
商品開発				ワークショップによる商品構想・品揃計画、 試作品制作・改良磨き上げ、ブランド化と販路販促の検討												商品改良磨き上げ、新商品の 開発、販路開拓、宣伝等		
観光体験プログラム開発								関係機関との協議、提供形態及び運営 形態の検討・決定、協力者の確保								新たな体験の開発、宣伝等		

### 11.4 おもちゃ美術館整備運営スケジュール

	令和元年度 (2019)			令和2年度 (2020)				令和3年度 (2021)				令和4年度 (2022)				令和5年度 (2023)		
	7	10	1	4	7	10	1	4	7	10	1	4	7	10	1	4	7	10
構想・設計				構想				基本設計・詳細設計										
施設整備工事								土木建築工事										
備品製作・購入・施工												内装・備品						
人材育成								スタッフ募集・研修				視察・木育キャラバン						

---

## 12 実現に向けた課題

### 12.1 道路の改良

道の駅予定地は、急勾配の坂とカーブが重なっており、交通量の増加に伴い歩行者の安全確保とドライバーのストレス軽減のため、次のことを関係機関と協議のうえ検討していきます。

- ◆高知市方面行きに右折レーンの新設
- ◆越知町方面行きに左折レーンの新設
- ◆道の駅出入りに信号機の新設
- ◆敷地への出入り口が一箇所であるため、2箇所程度の増設
- ◆道の駅があることが視認しやすい標識の設置

### 12.2 新商品開発と既存商品ブラッシュアップ

道の駅の運営コンセプト「ごちそう佐川」にマッチする地層シリーズや町内の農産物を使用した新しい加工品を開発する必要があります。

このため今後、加工品製造者と生産者のマッチングによる商品開発等を目的にワークショップを開催します。

併せて、現在あるいろいろな加工品やお土産についても、ターゲット層を絞り込んだ商品の磨き上げや、トータルデザインによるパッケージの変更等にも取り組みます。

## 12.3 運営組織の設立

道の駅を運営する第三セクター設立に向けた準備を進めます。

第三セクターの形態としては、株式会社、財団法人、NPO法人などが考えられますが、佐川町においては以下の理由により一般財団法人とします。

①道の駅は、運営主体の利益を追求するのではなく、これを利用する町内の生産者、事業者の所得向上や、町民の交流や憩いの場の提供といった公益的な目的を持つことから、非営利法人であり、かつ収益事業を行うことができる法人形態がふさわしいこと。

②道の駅は、その目的から物販、飲食、外商、おもちゃ美術館などの収益を伴う事業を行う一方で、情報発信、観光案内、商品開発などの非収益事業を併せて実施することとしている。その事業効果を高めるためには、自己の事業継続と出資者利益を優先すべき営利法人ではなく、これらを制約なく一体的に実施しうる法人形態であることが必要であること。

③非営利法人で運営する場合の事業採算性（経営効率）の確保については、法人の運営責任者の人選が重要となります。そのうえで経営努力を求める仕組みとして、指定管理契約の中で利益目標に応じた調整が可能であること。

なお、県内の同種施設の運営組織の形態としては、第三セクターの株式会社による指定管理方式が大勢となっています。一般財団法人の事例としては高知県地産外商公社、大月町ふるさと振興公社があります。

### 【道の駅運営組織体制（案）】

